

教育

一般社団法人 現代教育研究協会

会報

56

題字 榎本頼兼氏

(平成8年～平成20年 京都市長)

発行所

一般社団法人 現代教育研究協会

〒605-0981

京都市東山区本町4丁目131

クリスタルハイツ1F

印刷所 株式会社 洛陽

コロナ禍での現代教育研究協会の在り方を考える

会長 梶村健二



〈新型コロナの影響〉

昨年来の新型コロナの影響で、社会全体の多くの活動が停止または中止になりました。現代教育研究協会の昨年度の活動を振り返ると、五月の総会は書面審議、第一回、第二回講演会及び夏の懇親会は中止、第三回

講演会は十月二十四日に京都精華大学学長のウスビ・サコ先生の講演会を実施、第四回講演会及び新年懇親会は中止し、当日ご講演いただく予定であった木村先生からご提供いただいた日タイ教育交流協会の資料を配布し書面での学習機会を提供させていただくことにしました。このように実際の活動については、第三回目の講演会を除いては会員の皆様と顔を合わせての活動を行うことはできませんでした。その中でも唯一実施できたウスビ・サコ先生の講演会では大変すばらしいお話をお聞き

することができました。もちろん予定していた講演会については多彩な講師の先生方をお願いして、みなさまに興味深いお話をお聞きいただく準備を進めてきていただけに中止になったのは非常に残念です。私自身関係している各種の会議でも、書面審議、オンライン会議、オンライン講演会、録画視聴（DVD、ネットユーチューブ視聴）などがほとんどで、対面での会議は数回でした。数少ない対面での実施では、感染予防のため、三密を避ける、マスク着用、体温測定、PCR検

査実施、フェイスマスク着用、アクリル仕切板設置など様々な感染防止対策を行っての会議、集会、講演会が実施されました。

〈オンライン講演会〉

講演会の主流はオンラインになりました。パソコンの画面を通しての講演は、直接話を聴いているわけではありませんが、何百人もの参加者の講演会を後ろのほうで聞く従来のスタイルの講演会と比べると、むしろ講師との一体感があり、講師と一対一で話を聴いているような錯覚に陥りました。あまりそういうと普段の聴く力を疑われませんが、オンラインのほうが集中して話を聴けたように思いました。パワーポイントの資料も事前に配布されていたりしている

と非常によくわかるし、パワーポイントの画面も見やすいようでした。しかし、知り合いの大学の先生によるとオンライン授業は講義の準備も大変だし、本当に学生がきちんと学べているかどうかの確認がしにくく難しいという話を聞きました。

〈オンライン会議〉

自宅にいて複数の参加者と会議をするオンライン会議では、資料が事前配布されていると会議に集中しやすい、また、パソコンの画面とオーディオシステムとで見やすく、聞きやすく、わかりやすい、ほかの人の意見

も聞きやすいというように感じました。さらには、パソコンのネット環境、Zoomアプリの導入や操作等の問題はありますが、会場までの往復時間が節約でき、時間的には開始時刻、終了時刻が明確であり、ほぼその通り進行するので予定が組みやすく時間がうまく活用できるという利点もあるように思っています。

しかし、全体の雰囲気がかからない、あるいは全体の会議としての一体感がない、会議の後での交流、会話がでない、会議の公式発言のみで参加者同士の本音の話が聞きづらいという側面もあることは否めません。

〈会食会〉

多人数での食事会はすべて中止、また会食を伴う会議は中止となりました。多くの人と食事をしながら懇談する中で豊かな人間関係が築かれてきたこともあると思います。感染予防対策を十分講じて、会議や会食が行われることもありませんが、会場は広い会場で大きなテーブル、一人一人の間隔はかなり広い、前席や隣席との間には高さ八センチ程度のアクリル板が設置され、食事中飛沫が飛ばないように配慮されています。また、食事中はマスクは外すが、話をするときにはマスク着用で、ビールやお酒を前や隣の人に注ぐことはほとんどないといった

状況です。一人一人が個別に食事をしていて、たまたまその前や隣に同席して食事をしていて、という感じですが。一緒に食事をするというよりも、同じ時間、空間で食事をしている人が複数人いるというようなことで、従前の会食とは異なる様相です。

〈これからの時代における人とつながり〉

まだまだ新型コロナウイルスは終息するところまで行っていないですが、これまで通りの対面で顔を合わせてお互いの顔の表情や声の出しかたなど直接話すことでしか得られないつながりを大切にしつつも、これからは新たな人との関係づくりも大事になってくるのではないのでしょうか。可能ならば従来通りの直接対面でのつながりを基本にしつつ、オンラインでのいわばハイブリッドで人とつながることをもって考えていかなければならないのではないかと思います。これまでの当り前の日常を見直し、新たな日常が安心・安全な生活の上に進んでいくことを願うばかりです。

普段の生活ができていたことのありがたさを痛感するとともに新たな生活スタイルの確立が求められています。新型コロナウイルスの影響で私たちの生活は一変しました。これまでの生活の中でよかつたことは形を変えてでも

引き継いでいく、そのための創意工夫が大事です。何を残し、何を捨てるのか、このことをしっかりと考え行動する必要があります。

「活動は止めない」「目的を明確にし、その目的が実現できる手段を考える」会員の皆様の安心・安全を最優先に、今後の現代教育研究協会での講演会等の在り方もより良い方向を目指して考えていきたいと思っております。会場への往復交通機関での感染予防、安全確保、ネット環境整備など多くの課題がありますが、今後ワクチン接種の進捗状況も見据えながら皆様と一緒に知恵を絞って具体的な方法を模索していかなければなりません。いろいろな積極的なご提言を承りたいと存じます。

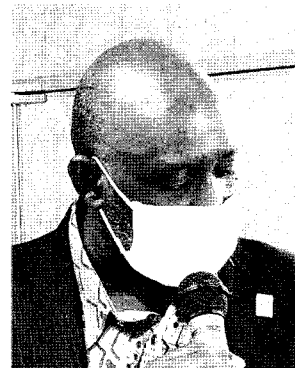
昨年度ほとんど会員の皆様とお目にかかる機会がありませんでした。今回皆様から頂いた近況報告をこの会報に掲載いたします。今年度は皆様とお会いできることを楽しみにしています。

現代教育研究協会は教職経験の有無を問わず、会員が相互に教育の現状を学び生涯学習の環境として様々な現代社会の課題について学ぶ場として森藤吉先生が創設されて以来約五十年がたちます。今後ともこれまでの歴史をしっかりと受け継ぎ会員の皆様の心に寄り添いながら進んでいきたいと考えています。

第一回講演会 令和二年十月二十四日(土)

「グローバルの視点から」日本の教育をみる

京都精華大学 学長
ウスビ・サコ氏



はじめに

こんにちは、京都精華大学のウスビ・サコです。

いただいた資料を読みますと、皆さんはかつて校長先生や日本の教育現場でそれなりのポストと役割を果たされてこれらと書いてありました。私の話の中には五十%が批判になってしまおうので、皆さんが取り組まれてきたことに対して悪口になる話になるかと思えます。大変恐縮ですが結論を出すつもりはないので、私が思っていることを率直にお話して共有しつつこうした見方もあるなど、たまには辛口のところもありましようが大目に見て頂いてお許しいただきたいなと思えます。

私の話は日本の学校、例えば子どもとか、日本の教育の特徴、テンプレートされた、あるいはフレーム化された教育とは何かということ。これは、多少学習指導要領みたいなものをどう皆さんがみられているかも踏まえて、私なりの見方をお話したいと思えます。それと現状を考えればグローバル化、多様化の中で教育がどういう風に考えられるか、思っていることがあるので少しお話しできればと思えます。余りにも沢山ありすぎて自分でもどうやってブレイキを掛けたらよいかと思っております。

最近書いている世界思想社で連載中の「空気を読む」の中に「日本人とみそ汁」について書いているのですが、空気を読めなくなった日本社会は何なのか？ つくられた概念・価値観ではないかと少し思っています。後ほど触れていきます。

マリの紹介

私は西アフリカに位置するマリ共和国(以下マリ)の首都バマコで生まれ、幼少期を主にバマコで過ごしました。「マリは

現地のバンバラ語で『カバ』のこと、出身地の首都バマコは『ワニがいる川』です。ですから、日本語で紹介すると『カバ共和国のワニ川から来ました』となります。マリは歴史的にも古い土地です。もともとガーナ帝国、マリ帝国、ソンガイ帝国とに分かれていました。八、十六世紀ぐらいまでは様々な帝国があった場所です。その時に出来上がったのがそれぞれの民族に違う職業が与えられ、分業社会が出来ていきました。「サコ」と聞くと、たいていは商人の家系と考えて間違いありません。

マリの民族楽器「コラ」の楽器演奏の紹介。マリの演奏者は世襲制で、誰でも楽器を触ることが出来ません。マリは文字文化より口承文化です。マリの服装は藍染めが有名です。日本に来て藍染めがあることに驚きました。マリでは伝統儀式では必ず藍染めの服を着ることになっています。他にマリには世界遺産が四つあり、その一つの「ジェンネ旧市街」は泥でできた文化遺産です。モスク建築の表面に塗っている泥は発酵させて出来ています。毎年その表面を塗り直すのが一つのお祭りにあたります。二つ目の「ドコン族の居住地」は複合遺産で彼らの価値観そのものの時代が世界遺産です。ドモン村に行くと、長老の集会所がありお祭りは十五年に一回行われます。その祭りを



マリの教育制度

マリの教育は家と地域で分担して教育をします。マリはフランス語圏です。小学校六年、中学校三年、高校三年、大学五年です。すべて無償ですが、留年制度があります。二回

ぐらい留年すると強制退学となります。小学六年生の時に国家統一試験が一日あり、普段の成績が良くても合格しないと中学校生になれません。チャンスは三回あり、合格しないと退学です。高校生ぐらいになると五歳ぐらいの年の差が出来ています。高校を卒業する時にバカロレアの試験があり、ふるいにかけた学校制度です。マリの学校はフランス語でおこないます。家に帰るとパンバラ語や民族語を喋ります。しかも感覚が違います。学校の位置づけと社会の位置づけの違いは、家事を手伝ってはじめて宿題をすることが許されます。地域や家庭でやるべきことをきちんと済ませてから宿題をすることが基本です。学校は学業の内容を教え、倫理は家庭や地域で教えます。すべて学校に任せて子どもが悪くなったのは学校のせいにはしなないです。

五回過ごした人は神様扱いになり、だいたい六十一歳以上の人は村の相談役になります。日本では全員が神様になりそうな気がします。家は三角屋根の特殊な形や台所など生活面のつくりもこのようになっていきます。三つめの「トンブクトウ」はサハラ砂漠の中にある一つの街で、もともと交易の中心地でした。四つ目は「アシキアの墓」です。ピラミッドを模して泥でつくられた墓だから評価されたのでしよう。首都バマコは、人口が増え都市化が進んでいます。一人の女性が6・3人の出生能率を持っています。零才から六十五才の人口が九十パーセントを超えています。

日本人は学校に期待しすぎです。私は日本の学校の一部大好きです。例えば、みんなを使う場所を掃除する。愛着を持つ一つのプロセスです。もう一つはみんなで食事することや時間を共有することでお互いに格差なくいろんなものを共有できることが大切だと思っています。

子どもと親

私は、父の仕事の都合で幼稚園に入園するまではマリの様々な地域を転々としていました。その頃はいろいろないたずらばかりして、落ち着かない子どもでした。親はそのまま自宅で育てたらヤバイ大人に育つと心配して、小学四年生の時からバマコから三百キロぐらい離れた「セグ」という町で学校の教員をしていた親戚の家に預けられました。簡単には家に帰れない田舎町で、電気も水道もありませんでした。高校に進学するまでそこで過ごしました。マリでは高校の成績上位者三〜五人が卒業後、国の奨学生として留学できます。マリでは留学できる人を手紙やラジオ放送で知らせます。遠くの親戚も全員聞くのでお祝いのパーティに駆けつけ、見送りに来てくれました。その人たちに帰国するたびに饞別のお礼をしなければなりません。忘れると腕時計もすぐになくなります。

北京で一年間、中国語を学ん

だあと南京の東南大学で建築学を専攻しました。その後は同じ漢字文化圏で研究を深めようと思つて、京都大学大学院に入って建築の分野の中で特に建築計画を学びました。住宅、コミュニティを研究しています。そして大学院修了後も京都に残り、01年に京都精華大学の専任講師になりました。この間に、同じく南京に留学していた妻と再会し、94年に結婚しました。02年には日本国籍を取得し、子どもが二人生まれました。学長になる前に人文学部長をさせて頂いた経験があります。

一般的に、マリの家庭には子どもがたくさんいるので、一人一人と個別に向き合っている余裕がないこともあります。家庭によっては一夫多妻なので、なおさらです。(マリでは一人の夫に四人まで妻との婚姻が法律上認められています)。そのためか、子どもの世界には深く介入せず、親と子どもとが適度な距離を置くのが基本です。子どもが手伝いをするのが当たり前です。勿論それが必ずしもいいとは限りませんが、ある程度早くから自分でいろいろなことが出来るようになります。日本の場合は、すべてが子どもを中心

日本の教育の特徴

テンプレート化、フレーム化教育
 (「日本人」という幻)
 マリと日本の親子の距離感

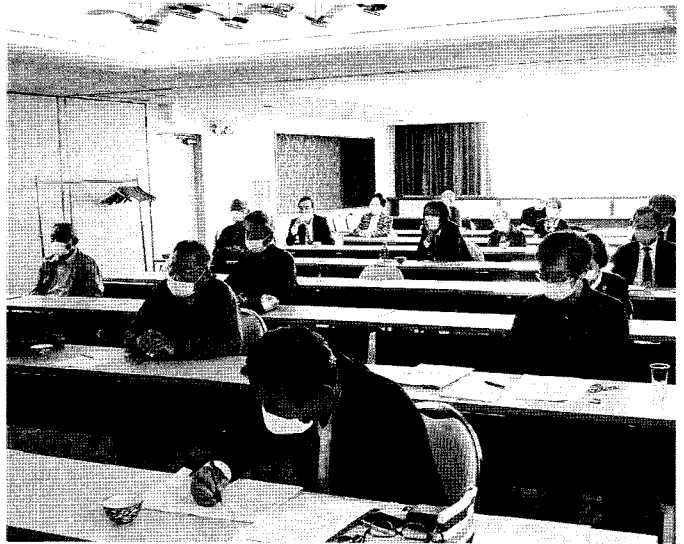
子どもの成長過程とフレーム

子どもが多いようです。子どもがいる家庭では、親の時間も、ライフスタイルも、全部子どものために調整されるのです。子育てには悩みはつきものです。しかし、日本の親が純粹に子どものために悩んでいるのかというと、そうでない場合も多そうです。むしろ私には、社会がつくり上げた理想像が重圧となっているように見えます。子どもではなく、社会が親を苦しめているのです。きつと親も、のびのびと育てたほうがいいことなど、百も承知でしょう。しかし、社会のフレームに収まらない人間に成長したらどうでしょう。そのことで世間から非難されたらどうしよう、と萎縮しながら子育てをしています。

長男が中学一年生の時の出来事です。下校途中に先輩が買い食いをしていたのを見て「買い食いしてんじゃん」と言ったことで殴られ、駅員が止めに入るとどの大喧嘩になりました。学校から深刻な電話があり、学校に行くと校長先生が遠回しに話をしてくれます。そこで親子が現れて深いお辞儀をされた。私は「なんでこの状況があるん」と尋ねると親同士の話し合いをした。どうして子どもの喧嘩に親が口を出なければならぬのでしょうか。口の利き方を知らないなら、先輩の責任で教えてあ

げれば済むことではないでしょう。親や教師が入って複雑にするべきではないのではと、言っている場から帰りました。すべての子どもが同じような解決の仕方ではないかもしれませんが、子ども同士で解決すべきではないでしょうか。学校の対応に疑問を感じた出来事でした。

長男は自己紹介をするとき「京都生まれの北京育ち」で、フランス人学校に通っています。「親は日本人とマリ人です」などといいます。彼は四歳半まで京都で過ごしたのですが、妻の仕事の都合で、中学生になるまで北京のフランス人学校で学びました。妻は、長男が「北京育ち」という認識を持っていることを知って、かなり驚いたそうです。初めてそれを知ったのも、帰国してから数年後のことでした。北京で生活していたとはいつても、住んでいたのは日本や欧米の駐在員・外交官ばかりの団地でしたし、妻としては、家庭内は日本という意識でした。さらに学校もフランス式でしたから、中国のアイデンティティまで持っているとは意外で新鮮に感じたそうです。一方、次男は帰国後しばらく、長男よりも日本人化する傾向が強かったように思います。時間をきっちり守り、宿題も忘れず、いわゆる理想の日本人像に頑張っている自分を近づけようとしているよ



うに見えました。

北京のフランス人学校には京都に憧れを持つ人が多く、「京都出身」は一種のステータスでとでしよう。しかし、帰国後、日本の小学校では「日本人」として扱ってもらえなかったのです。皆が君は「リトルオバマ」と呼ばれ、私は「アキトです」と言っても、君は「日本人じゃない」。先生も「おう！ いいじゃん。リトルオバマにたとえられて」といった受け止め方をされた。そもそも次男が北京に行ったのは生後八か月で、日本のフレームを身に着けて

いるはずもありません。彼は、北京では自分のことを、日本人でありマリ人、そして場合によってはフランス人だとも思っていました。ところが、いざ日本で生活してみると全くの他者として扱われる。その戸惑いが、日本人化を加速させたかもしれない。彼は一時、中国語を忘れてしまうほどでした。

長男が複数の

アイデンティティを得た背景には、日本での幼少期に異文化と触れ合う機会に恵まれたことであつたかもしれません。私の家には日々、友人や研究室・ポラントイア仲間などが押しかけていましたから、彼はあらゆる国のあらゆる個性を持った人たちに遊んでもらっていました。私が忙しい時には、彼らが保育園まで迎えに行ってくれることも度々ありました。こうした経験を通して、様々な価値観を知り、肯定するマルチフレームの感覚を養ったのだらうと思います。息子たちの成長過程を振り返ると、フレームは必ずしも固定的なものではないのだらうと思

ます。そして、子どもの成長において、教育や学校が重要な役割を果たしていることを痛感するとともに、大きな可能性を感じました。

ご飯とみそ汁

長男が保育園に通っていたころ、よく日本流の指導を受けた。登園すると毎日、朝食は何を食べさせたか書かされたのです。そして、叱られました。「サコさん、朝ご飯はパンとヨーグルトとバナナじゃあダメですよ……。ご飯とみそ汁を食べさせてください。手間をかけた料理が大切です。楽をしてはいけません。作り方がわからなかったら指導しますからーえっ！ そのなん？ ごはんとみそ汁にそこまで重大な役割があるなどとは思いませんでした。ひとまず素直に応じ、日本人妻はみそ汁とご飯を朝食に用意するようになりまし。しかし本当のところ、私はそれを子どもに食べさせないといけないとは一切感じていませんでした。なんで私たちが保育園のフレーム（枠組み）に合わせなあかん！ というのが本音でした。保育園としては、子育てへの親の意欲が足りていないという認識のようでした。その保育園には栄養士による「子どもの食べる料理指導」やお泊り保育への参加など、親のためのイベントが年に何回かありました。私は、忙し

いから子どもを預けるのに、逆に忙しくなるとはどういうこと……、と思いつつも、結構楽しく参加しました。

私以外の外国人出身者も、「日本に生まれてから、日本のやり方で子育てを押し付けられることがあつたようです。これは「伝統」なのだから従ってください」。保育者や幼稚園からしたら、家庭内の子育てに介入することは子どもを大切にしている行為の一環なのです。子どもは大人の思い通りにならないのが世の常。決まりや常識を押し付けられたところで、軽やかにその外側へ逃げていきます。そのため、子どもだけでなく、親もコントロールする必要があるので。小学校に進むと、子どもも少しずつ自立していきます。すると親ではなく、子ども自身をいかにフレームに収めるかが重要になるのです。年齢が上がるにつれて、その強制力は増していきます。

もちろん、マリにも学校のフレームはあります。しかしそれと同時に、地域や家庭にはまた別のフレームがあるので。学校はフランス的、地域は民族的、そして家庭にはさらに別のフレームといった具合です。それぞれ異なるものとして共存し、絶対にオーバラップしません。だから民族の個性も多様性も維持されるのです。マルチフレ

ムを軸に、子どもが様々な次元の教育を受けるのが基本なのです。しかし、日本では、全てが一つのフレームに統一されがちです。

「日本人」のオルタナティブ

「日本人」の子どもたちだっ
て、教育を受ける前はそのフ
レームの外にいたはず。小
学校を訪れと、低学年の子は本
当に気さくで元気です。平気で
私に「なんで黒いん？」と聞いて
きます。私は、それに「テニ
ス焼けやねん」と答えます。し
かし、高学年になると、質問
が出来ません。質問をするため
には、どういったプロセスを踏
むべきかということがすりこま
れ、自分の気持ちや考えをオー
ブンにできないのです。

「外国にルーツを持つ子ども」という言葉があります。しかし、こうやってラベル付けをすることと自身が、日本のモノフレームを絶対視し、そこに吸収することを前提としていけるように思えて仕方がありません。「外国にルーツを持つ子ども」には、何らかのサポートや配慮、そして日本文化教育が必要だという「空気に」満ちているのです。多くの場合、「外国にルーツを持つ子ども」と呼ばれる子は、「日本人」という幻に取り込まれ、もともと持っていたフレームや個性を放棄しなければならなくなります。

「でも、ちやうねん。」

オルタナティブ(別の道)はいくらでもあるのです。もちろん、全ての人がマルチフレームになつてしまうのも、気味が悪いことだと思えます。しかし、モノフレームで生きる場合であつても、ただ与えられた型にはまるではなく、自ら選び取ったり、作り上げたりしなければ、息苦しいのではないでしょう。時代が変われば、フレームを再生成する必要が出てくることだつてあるでしょう。納得もしていないモノフレームに固執したり、他者を巻き込んだりする必要などありません。同化・吸収するのではなく、多様なフレームを認め合う社会。私はそれが、美しい世界なのだと思います。

「コミュニケーション」の課題

「日本に来て失敗したこと」

下宿していた大家さんには、大変親切にしていた。パーティイしてもよいといわれ毎週パーティイをしていました。私の部屋が狭いので大家さんが「僕の家でパーティイをしてもよい」と言われたので、五人、十人、二十人、三十人になり、大家さんは三十人にもなると誰だか解らないねと言われたので、全員の写真を取り、紙に貼って名前を書き渡しました。その時点で、「いい加減にせいよ」と言いたかつたのです。京都での生活

も長くなり、ご近所との関係も良好になつてくると、何事もうまくできていると思うようになり。そうした中で、私を驚かせた出来事がありました。自宅で知人や友人、ボランティアの方と毎週パーティイやミーティングをしていました。ある日、ボランティア組織の事務局を設けていた私の家には、大勢の方々が連日訪ねてきて、時には打ち上げをすることもありました。また、ゼミの学生たちもよく私の自宅に来て、パーティイと一緒にサッカーの試合を観戦していました。むしろ、何か催しをした翌日になると決まつて私に「賑やかでよろしいね」「あなたが来て活気が出たね」などと声をかけてくれる人が登場することに気をよくしていたほどです。そうこうしているうち、サッカーの試合を観戦したある晩、警察官が訪ねてきて「近所から苦情が出ていますので静かにしてください」と言われたのです。思わず警察の方に「近所の方々はいつも私を褒めてくれて

いるので苦情などあるはずはありません」と伝えたのですが、この出来事は私にとつては非常にショックでした。これは京都だから起こつたことなのでしょう。概して日本の言葉に隠されている裏の意味まで読み取るのは至難の業です。日本に住む外国人は何度もこのような経験をしているに違いありません。しかし、私の場合は、近所とのやり取りの中で、日本あるいは京都に住むコツを学びました。

「空気を読む」「はつきり意見を言わない」「みんなとは反対の意志を悟られまいとする」な

「これから「コミュニケーション」
「空気を読む」「はつきり意見を言わない」「みんなとは反対の意志を悟られまいとする」な



ど、日本では美徳と思われがちな行為は、むしろ人間関係を冷淡にしているように思います。そして日本に住む多くの外国人はこうした生活コードを共有していないにもかかわらず、多くの方はそれが理解されているものと考え行動しがちなようです。もともと「空気を読む」というのは、相手に対する配慮だつたはず。もし相手がこの配慮の生活コードを共有しておらず、そしてもし相手に対してなお配慮をしたいと思いますのださるなら、「空気を読む」とは違う新しい配慮のかたちを創造することが必要なのではないでしょうか。

「グローバル化」と「国際化」は全く別物

グローバル化の定義は、ヒト、モノ、カネ、そして情報が国境を越えて自由に行き来し、それらの価値は一国の判断で決められないこと。

国際化は「国対国」あるいは「一国対複数国」の関係を表します。国境線によって区切られた各国の社会が相互に緊密に結びつき、活発な相互作用を強めていくプロセスのこと(二十世紀の現象)

一方、グローバル化は国家間の関係ではなく、個や特定集団が国の概念を超えて存在すること、基本的に私たち「個」が中心となります。価値はネッ

トワークで判断され、一国のルールや政策で決めにくい。情報と技術発展が鍵になる社会(二十一世紀の現象)。

個々が違いを認め共生していくかが問われます。これから生きていく中で、グローバル化や多様性を避けて通れません。

グローバル化では、ものに価値がおかれるため、ものによって人の価値が判断される危険性があります。

在留外国人が増加しています。日本のグローバル化は進んでいません。昨年(2019年)、在留外国人は七年連続増加し過去最多二百八十二万人を突破しました。日本の総人口のわずか2.4%だが、人口減少の歯止めがかけられない現状で彼らの労働力に頼らざるを得ない状態は当面続きます。働きに日本へ来る外国人たちに日本語や日本文化を教えたからと言って、彼らの価値観が日本に同化するはずがありません。異なる背景を抱える人間をどう認め、どう受け入れるか。これこそが今、私たち個人の中で重要になってくる課題です。

日本に来て思ったこと(共生社会の実現、ダイバーシティが重要)

①私の目的は同化、文化的同化ではなく、居場所の開拓であった。

②グローバル社会の中で、人間はどう生きるべきか「共存社会」の実現とダイバーシティ

③多様性(ダイバーシティ)とは
。多様性とは、人種、性別、宗教、性的指向、社会経済的背景、及び民族性など、個人間に存在する違いを指す。

。多文化主義は、複数の文化的伝統が社会で受け取られるだけでなく促進される状態をいう。
。主な違いは、多様性は個人間の違いを認める一方で、多文化主義はそれを受け入れ、さらに一歩前進する傾向があること。

④異文化認識と文化スキーマ
スキーマ理論によれば、人間は自分の体験した事を成長記憶に保存し、それが知識として組織化され、それに基づき行動を起こすことになる。
。ステレオタイプとして他文化圏の集団や個人を特定の文化フレームで指定する。
。相手の弱点や足りない部分を判断基準としやすい。
。役割期待から生まれる問題意識のギャップ

⑤日本で感じる文化の違い、意識のギャップ
。アフリカ出身者として日本で生活するにあたってムスリン(イスラム教徒)として日本で生活すること

。外国人教師として日本の大学で教えること
。組織の役職者としての位置づけ(日本人学部長の位)

。異文化を持つ日本人としての存在
。私自身が日本で生活するときには余り不思議に思われない、どこか違う部分があるのではないかと思いません。

グローバル化する大学教育の在り方

NYタイムズが大注目

2018年に学長になった時にニューヨークタイムとか色々なところで取り上げられました。私も驚く言葉がたくさん使われていました。グローバルな人たちから見た日本は、均一化を望んで目指した社会なのか。多分、あれ、何かの間違ったのかアフリカ出身の人が学長になれるね。これって、日本に対する期待なのか、批判なのか。よく解りませんでした。BBCやフランスのラジオとか。日に日に外国の取材が増えてくる中で、私が特別なことをやったのかな?

何もやっていない気がしますが。私を学長に選んだ精華大学の同僚もアフリカ人を選んだわけではなく「サコ」を選ぶという事だったと思います。この雑誌の中に、世界の中で最も影響力のあるアフリカ人百人の内二十六位に選ばれていました。全部ジャーナリズムにやられてる気がします。それぐらい外から日本をみた時に日本の社会が不思議に見えることはなぜで

大学教員になって

自分の研究室の学生たちを観察すると、学生たちは研究室という場と教員を利用してグループダイナミックスを形成し、仲の良い集団になつたかに見えます。しかし、時間が経つと学生たちは小集団に分裂し、小集団同士で暗黙の競い合いが始まります。さらに同じ小集団に属するメンバーなら仲が良いのかと思うと、実は空気を読んで他のメンバーに自分を合わせている人が必ず数名いることが分かります。それが明らかになるのは、ゼミ旅行などで移動や部屋割りをする場面です。打ち合わせでは、「一緒の車にしようね」「同じ部屋で嬉しい」と発言していた学生が、打ち合わせの後に研究室に戻ってきて、先ほど決めた内容を見直してほしいと言ってきます。「なんで皆の前で言わなかったん」と尋ねると、「空気を読んで場の雰



囲気を壊したくなかった」と答えるのです。私からすると、このように集団を決めたことを抜け駆けして変更しようとするから永遠に仲良くなれないのではと思っっています。

サコゼミはフィールドワークでマリ行きます。マリでは苗字が民族や社会的属性を表します。また、決められた苗字の間で冗談を交わして、お互いに支えあってきた「サナングヤ」と呼ばれる習慣があります。マリを訪れる外国人たちは、ホームステイ先の苗字が与えられることが多く、そうなる他の民族の人々と出会った際に「サナン

「グヤ」という風習に従ってきつい冗談が吹っ掛けられ、しかもそれを否定的な反応をしなければいけないことになっているので、大いに戸惑うことがあります。学生たちはこのような冗談に泣き出したこともあります。ほかの国にも「生活コード」はありますが、日本の「空気を読む」文化は特殊で、複雑な文化理解が必要です。

京都精華大学の挑戦（「個」の学生への対応）

大学についても少しお話しします。学内には「自由自治」と刻まれた石碑があり、大学の建学の理念に「自由自治」と「人間尊重」の二つを掲げています。1968年の開校当時から一貫して掲げている大学の理念です。大学として学生を大事にし、人間として扱う、学生自らこの大学の発展に参画するというところで「自由と自治」をしっかりと担保するという考え方です。どの大学も学生の獲得を巡って、激しい競争をしています。ただ、世界的にみると人口は増えていきます。だから教育を受けるチャンスがあるなら、いろいろな国の人に教育を与えればいいと思います。

私が学長になった時、全ての試験を留学生にオープンにしました。留学経験だけでなく、日本人と同じ試験を受けることが出来ます。すると、結構、優秀

な留学生が増えてきて、ここ二年で留学生が順調に増えました。意外なことに日本人学生も増えて、大学が元気になってきました。今、大学は入りやすくなっているのに、進学率も高くなっています。でも、自分が何をしたいのか、何者になりたいのか、あるいは自分とは何なのかと考えるチャンスは非常に少ないと思います。例えば、哲学の時間とか、リベラル・アーツ（教養教育）の時間とかを増やすべきだと思えます。多様性のある大学、かなりグローバルなキャンパス環境、あるいはそこで育成される人間たちが、自分たちの社会を変えていく力を持った学生になってほしい。だから大学の存在自体は京都のみならず、世界に向けて開かれた大学、あるいは色々なところで可能性を提供していく大学にしたいと思っています。リーダーは先ず、最終責任が取れる人。その過程でいろいろな人と話し合える。要するに、いろいろな人と寄り添って物事を決めていく。そして決めたことについて自分が最終責任をとる、という

ことをきちんとしてくれる人がリーダーだと思っています。一年生の学生には、私とは何者か？ 自己の認識と他者の受け入れについて考えさせています。哲学を大切にしながら自分の声を持ち、自分の言葉で自分を語ってほしいと思っています。学生には、すでにある答えを探すのではなく、問いを立てる力を持つてほしい。小さな問の積み重ねが自分自身の価値観をつくります。その価値観を軸にすれば、異なる文化を持つ人とも対話し、理解し合うことが出来ます。自分自身を知ることから、本当のグローバル化が始まります。



令和2年度 会員の皆様の近況報告より

浅川栄治郎氏

相変わらず京都テルサの日本ポークスアウト京都連盟事務局に週五日努めております。一人職場で休めないため、おかげさまで四年間無遅刻無欠勤です。

必要最小限にとどめています。ただ、仕事の関係でZoomだけはいまうまくなったように思っています。

衣笠 孝一氏

一年間、自粛生活のもと、生活基盤が心筋リハビリのためプール通いとなりました。しかし、NHK大河ドラマのおかげで、去年後半、岐阜、福知山、亀山の各城と坂本の城址を尋ねられました。アクセントとなりました。

牛尾 誠三氏

趣味というか、自分の自由になる時間に短歌を作り絵を描いています。昔「近況を問はれ言葉が出てこずに問ひし人らを戸惑はしめる」という歌を作りましたが今はコロナとステイホームという言葉がすぐに出てきます。

小中 敏和氏

コロナ禍の中、不要不急の外出を控えた生活が続いています。もつぱら、DIY生活でもあります。家の小修繕。雑多整理。家の中には、こんなに物があつたのか？と、この一年近くつくづくと実感する日々でもあります。

岡本 幹也氏

税理士社労士業を半世紀にわたりやっています。新型コロナの支援等で忙殺されている日々です。この程度の支援で中小企業が救われるとは到底思われません。では代案を示せと言われるもお手上げです。般若心経の「空の世界」は難しいです。

芝田 一広氏

定年退職して丸四年。週四日の旧所属勤務と週一回の中国語の受講、週一回のボウリング、週二回のウォーキング、週二回の勝馬検討作業、年三回の鉄道

北波 博氏

近況となると、やはりコロナ禍の下での生活ということになるでしょうか。まず外での飲食はほぼなくなりました。外出も

の旅を兼ねた全国科学館巡り、そんなコロナ禍前に戻れる事を願っています。

関 みち子氏

令和二年度の現代教育は、コロナ禍のため予定が変わってしまいました。自粛生活を守りながら楽しみを見つけ生活しています。この会と同じ二十数名参加する会では、十月からリモートになり八十才にして始めての経験をしています。

辻 康文氏

昨年のコロナ禍の緊急事態宣言で、七月まで体育館のジムやコートが使えず、早朝二時間の山歩きのみになりました。七月中旬から解除になり、ジムやシニアバドミントンが出来るようになりました。今は少し充実した生活リズムが戻ってきました。

堂上 英樹氏

自粛生活が長引き、梅小路公園へ散歩に出かける機会が増した。園内十五種、約二百本の梅が順々開花始め、人通りの少ない夜の遊歩道で梅花漂う風に触れ一人楽しんでる。木々が芽吹く日も遠くなく、皆で集える日の訪れを願う。

長積美智子氏

コロナウイルス感染拡大により外出を控える日々……運動も必要かと植物園を一人で散策し

つつ、様々な会合、講演会等へ参加できることの幸せ、人と人との出会い、心を交わせての対話の大切さを改めて感じております。

中森 美幸氏

外出を控えステイホームの毎日です。家事の他に読書やビデオ、脳トレやウォーキングを楽しんでいます。回数は減りましたが、東京での孫の世話は続いています。コロナが落ち着きましたら研究会に参加したいと思います。

野里 基次氏

いつもお世話になり、ありがとうございます。来年度も、関西文化芸術高等学校で授業も頑張ります。日々、かわいい高校生と交流しています。オーストラリアの孫達とも週一回リモート勉強会を楽しんでおります。

橋本 靖弘氏

このコロナ禍、経済格差・教育格差の増大が懸念されます。もう一度、「一人一人を大切にする」とは、どうすることなのかを問直し、「一人一人を徹底的に大切に」する教育の一層の充実が望まれます。

林 修氏

八十八才にとってコロナは恐怖で各種会合は中止か実施でも欠席です。日々充実と正反対の

毎日です。ひたすらステイホームで女城主に逆らわず、お互い体のあちこち不自由なのを労り合って暮らしています。○待望コロナ治療薬。

藤井 秀治氏

京都まなびの街生き方探究館に勤務して五年になりました。昨年度までは、連日子どもたちの声で賑やかでしたが、今はがらんと寒々しい毎日です。一日も早く子どもたちの体験の声で、賑やかになってほしいものです。

村岡 徹氏

市教委（学校指導課）と府公立中学校長会に居ります。コロナ禍で学校の授業、子どもたちの生活のみならず種々の会議のあり方が大きく変わりました。変化に対応する能力の必要性を実感いたします。

山崎 一茂氏

定年後も含め十四年間の長きにわたり図書館勤務でしたが、昨年四月から「堀川御池ギヤラリー管理主事室」に勤務しています。

山田 潔氏

退職して、もうすぐ一年。家族の介護と趣味に忙しい毎日です。日日新たな発見があり、驚きの連続です。良い驚きも悪い驚きもあります。でも、自分自

身が楽しめる人生を歩もうと決めます。日々心の精進に励んでいます。

吉川 定子氏

コロナ禍で体の衰えを気にしていました。昨年七月から近所の神社の境内で朝七時頃からラジオ体操の集いに誘われ参加しています。十人位ですが運動してお喋りして四十分位で解散、それから私の一日が始まる毎日です。元気です。

編集後記

令和二年二月三日、横浜に再度寄港した客船ダイヤモンド・プリンセス号から香港で下船した客に新型コロナウイルス感染症に罹患していたといったニュースが飛び込んできた。

四月十六日には、緊急事態宣言が全国に拡大され、五月に予定しておりました令和二年度総会・講演会は中止となりました。

三密、ソーシャルディスタンス等、感染対策を取り乍ら十月のウズビ・サコ京都精華大学長の講演会は開催することが出来ました。その後、再び首都圏・都三県と京都府・大阪府・兵庫県等に緊急事態宣言が発出され、その後の講演会等も中止せざるを得なくなる異例の年度となりました。

会員の皆様のご健勝とご家族の皆様様の安全をご祈念しつつ、令和三年度の本会の活動が再開出来ることを願っております。

(お知らせ)

長年事務所や講演会・懇親会場としてお世話になっていました旅館「銀閣」は全面建て替えられています。昨年十月二十二日には地鎮祭、起工式が行われ、来年度夏ごろ竣工の予定です。

一般社団法人 現代教育研究協会

事務局住所

〒605-0981 京都市東山区本町四丁目131番地 クリスタルハイツ1階
団体ホームページ <http://www.gendaikyoiku.org>

入会のお問い合わせ

メールアドレス Kyotogendaikyoiku@gmail.com
(メールには、お名前、フリガナ、メールアドレス、電話番号を明記してください。)